

大正期洋風住宅地伽羅橋園*

安田 孝**

明治末から大正期の郊外住宅地形成については、当時の郊外電車の敷設と関連づけて論じられることが多い。その多くが今日まで続く電鉄会社によって開発されたことは事実であるが、当時の都市膨張に伴なって増大した郊外住宅・宅地需要に呼応して地元資本によって開発されたものも少なくなかったのである。また、官公舎、社宅などとして開発された地区も存在した。これまでの調査研究は、電鉄会社による開発を中心に展開されたために比較的規模の小さい、電鉄会社以外の開発による郊外住宅地が見落されることが多かった。

一方、住宅や生活の様式としては、近代工業社会としての基盤の整備に伴なって、和洋混在の矛盾が拡大し、合理的な住宅のあり方をめぐる多くの議論が展開されたのも大正期である。そのような背景のもとで、当時の洋風に対するあこがれがこうじて、西洋文明に対する過大適応とも言える完全洋風住宅の導入・普及を考えた人も少なくなかったようである。このような例のひとつとして、大正6年発足の住宅改良会による住宅改良運動や、大正9年発足の文化生活研究会による啓蒙・普及活動、お茶の水文化アパートの建設を位置づけることもできる。そして、明治期には

和風日常家屋、洋風応接用別棟として展開していた和洋併存が、和洋折衷様式として中流住宅運動へと一般化し、さらに完全洋風住宅を実験した例がいくつか存在した。阪急電鉄の実質的創業者とされている小林一三も、その自伝で完全洋風住宅をもっと実現させたかったと記しているところから考えると、いくつか実施していたのであろう。ここに紹介する伽羅橋園は、当時の素人建築家による完全洋風住宅地開発の事例である。

南海電鉄本線が和歌山市まで開通したのが明治32年であり、44年の電車化を経て、その羽衣駅から伽羅橋までの支線が開通したのは大正7年(1918)のことである。当時の南海沿線の状況は、現在の堺市浜寺地区が海水浴場として注目を集め、その周辺には別荘地が形成されつつあったものと考えられる。これは初期の郊外住宅地の一般的な状況であり、大阪都市圏北部では阪神間の芦屋浜なども同様であろう。伽羅橋までの支線の開通に伴って、本線にあった高師の浜駅が廃止されたという記録があり、同時に、この駅舎の敷地はかつて同駅設置のため、山川家が私有地約1ヘクタールを南海鉄道株式会社へ寄贈したものであるとされている。さらに、翌大正8年(1919)5月に南海土地建物株式会社が

* 1984年12月20日受理

** 大阪大学工学部

資本金150万円で発足し、芦田川から今川までの紀州街道（現国道26号線）西側一帯の畑地を買収して高級住宅地を建設した（地価最高は一坪60円）。なお、同社社長に河盛新兵衛（羽衣）、監査役に山川七左衛門（高石北）、中谷喜右衛門（高石南）が就任した（『南海鉄道五十年史』）とある。以上は昭和42年の高石市郷土史研究会発行「高石町50年史表」によるものであるが、山川七左衛門が私有地を寄贈した山川家と同一であるかどうかは不明である。しかし、当時高石北地区に存在した山川家一族のひとりであり、しかも七左衛門自身が分家したとも伝えられている。また、南海土地建物株式会社は、経営上は鉄道とは無関係の会社であつたらしい。そこで伽羅橋園の建設であるが、上記の50年史表においては大正12年になってからのこととされている。同年5月に「アメリカから帰った山川逸郎は、大島佐一らと共同で伽羅橋駅東側に伽羅橋園（洋風木造住宅、現羽衣5丁目）を開設した（昭和29年5月近江岸夫人談）」とされる。しかし、日本建築協会発行の雑誌『建築と社会』の大正10年12月号に「高師の浜に浮き出た桃源郷『キャラバン園』」という郊外夢人（多分ペンネームであろう、筆者注）による記事が報告されている。また、完成予想図、山川（逸郎）氏設計と記される新邸外観と内部応接室、施工中の「キャラバン園」、「キャラバン園」建物の一つ、所謂「素人」の作成せる設計図、などの写真を掲載していることからみると、前記の大正12年5月の建設とする説は訂正されなければならない。さらにこのキャラバン園について「浜寺在山川七左衛門氏の令息山川逸郎氏こそ、其設計者であり、施工者であり、而して事業の経営者である」と記している。そして「氏は兵庫県立工業学校機械科の出身であつて其後亜米利加の某大学に学ばれたのだが此処でも、依然機械学殊に自動車を専攻されたとのことである」「我建築界に於ける驚異のレコードとして、而も、

建築技能と住宅改善の普遍化即ち一種な民衆化の先駆として、怎うしても、此処に叙記を逸することの出来ないのは、実に斯の、一大花園都市の設計者と、其施工者が、纔に大工杯を外にして、孰れも、専門家でない、只建築の趣味と経験と研究なる特異を有っている処の素人だから驚異せざるを得ないと同時に、寔に以て感服の外はない」と述べている。この記事の筆者は山川逸郎に面会して意見を聞いているが、ここでも亜米利加では建築の研究はしていないと答えていることから、彼のアメリカ留学は大正10年以前と訂正される必要がある。しかし、これは大正12年の渡米を否定するものではない。

ところで、山川逸郎の職業であるが、郊外夢人の記事には「現に、大阪にもガレージを有つて、自動車事業にも没頭している」とされているだけで明確ではない。一方、前記の50年史表では大正6年3月24日の町会議員選挙で16名の当選議員の1人として示されている。これは大正4年（1915）1月1日に町制の施行された高石町の第1回議員選挙であり、その後、大正10年3月24日、大正14年3月24日の選挙でも山川逸郎は当選している。また、大正9年8月の青年団長の協議の際に、北地区の団長として出席していることから、新制高石町の青年リーダーの1人として活動していたことが明らかになる。このような当時の都市近郊農村における地主出身の青年活動家が理想郷として構想し建設したのが伽羅橋園であつたともいえよう。

前記の紹介記事に続いて、『建築と社会』の大正11年1月号には山川逸郎による「西洋住宅と日本住宅——私の実験しつつある上から——」が掲載されている。一記者による記録となっていることから、談話記録と考えられるが、当時の住宅改善問題の普及状況を示すものとして興味深い。やや長くなるが、ここでは「最早、研究とか、思案とか云ふ如き、抽象的問題より脱し、努めて、世の進運

に取り遺されず、文化的機運に伴ふ処の生活を営為することが、文明国人として、寧ろ、吾人等の義務であらねばならぬ。而して、斯くの如き生活の改造は、実に、我等生活の本拠たり鑄造所たる住宅其ものより始めねばならぬ。……、住宅改善に多大なる興味と、多少の自信を有せる結果、現に今、南海沿線、高師の浜に臨める或一地域に、欧米式を参照せる理想的住宅群を建設し、水道、道路、下水、暖房、採光、花園、其他欧米都市の最も進歩せる田園都市を築きつつありて、是を地名に因みて、『キャラバン』園と名付けた」と述べている。さらに住宅に関しては「所謂新時代に於ける住居は、之を一つの標語的に云はば『家庭としての種々なる条件をヨリ多く備はると同時に、最大に手数と費用を省く生活』とでもいふことが出来得る」とし、日本家屋と西洋家屋の比較を外観、利便、構造、保健、経済などの側面からおこない、後者の優位を主張している。最後に「要するに、西洋家屋に住むてみると、日本家屋のような無駄と、だらしな事から脱れて、凡てが規則正しく、秩序よく進むで、生活に余裕を生ずる。そして、其処に、私共生活其ものに意義を見出す事が出来るのである」として、洋風住宅地の実験を始めたとされている。

住宅の概要は、最小のものは敷地一百坪建坪拾五坪二階建、当時の処で最大のもは敷地二百坪、建坪三拾坪二階建てで、七、八室であったと記されている。この数値は、当時の文化生活研究会などで発表されていた中流住宅の規模にきわめてよく一致している。住宅設備については「いずれも地下室を設けているのが何より便利であり、殊に、建坪三拾坪以上のになると、地下室に汽缶を設けて、スチム式の暖房設備があり、ホットエアのそれがあるのは殊に注意を惹く。上水は、其附近に於ける或地点の清冽な井水を電気動力で貯水池に送り、各戸の配管を通じて、始終供

給され、下水設備に到っては其各戸の便所が洗滌式にして、其附近の海中へ放水される装置と共に、頗る完備されている」という。附近の海中へ放水されていることは問題だが、上下水が地区全体として計画されていたことは注目される。さらに「構造其ものは、全然洋式だが、此処にも、我居住生活の過渡期に在る現在を考慮されて、何時でも、畳敷と成し得るように寸法を取っている事は嬉しい」と記されているところから、生活様式としての和洋折衷に対応する配慮がなされていたことがわかる。

このようにして実現した伽羅橋園の全体は、現在のところ不明であるが、大正10年時点で第一期計画が施行中であり、第二期、第三期の工事着手の予定が述べられていた。地区の中心には噴水のある三角形の公園が設けられていたが、昭和初期にはすでに消滅していたと伝えられる。高師の浜支線と南海本線の間三角形の地区附近が第一期地区と考えられ、洋風住宅が改造あるいは移築されたものも含め7戸現存する。しかし、その大部分は居住者(所有者)が変わっており、この60余年の変動を反映しているようである。『建築と社会』に記録されている山川逸郎の洋風住宅も所有者が変わっている(現存住宅1)。

伽羅橋園を建設した山川逸郎と山川七左衛門とは親子と伝えられているが、七左衛門が関係した南海土地株式会社の高級住宅地の所在も明確ではない。一方、支線の北側が比較的閑静な住宅地であり、昭和戦前期と考えられる洋風住宅も散見されることから、この地区が第二、三期伽羅橋園かもしれない。

『建築と社会』の大正11年9月号に当時の大阪府警察部建築課長池田実が「小住宅の改良に関する感想と希望」という文章をのせている。その中で郊外住宅地開発の方向についていくつかの事例をあげて論じているが、「住宅改造の方針としては、前述の如く全部を一躍西洋式の椅子卓子及寝台式の革めんと

する急先鋒がある。先頃伽羅橋とかに此の種の改良住宅が経営されたそうだが、……」と述べている。大正中期の多様な住宅改善と住宅地開発に関する調査研究が、その社会的背景も含めて総合的に展開される必要がある。そのひとつとして、羽衣、伽羅橋、浜寺などの郊外住宅地、別荘地は注目される事例である。

〔附記〕 電鉄会社以外の当時の洋風住宅地開発としては、例えば大阪芸術大学の山形政昭氏による芦屋文化村や三宜荘の研究が注目される（山形政昭「芦屋『文化村』の記」大阪芸術大学紀要〈芸術〉6号）。



現存住宅1（旧山川逸郎邸）



伽羅橋園の現存住宅と噴水公園の位置

大正期洋風住宅地伽羅橋園(安田)



現存住宅 2



現存住宅 5



現存住宅 3



現存住宅 6



現存住宅 4



現存住宅 7 (他から移築)